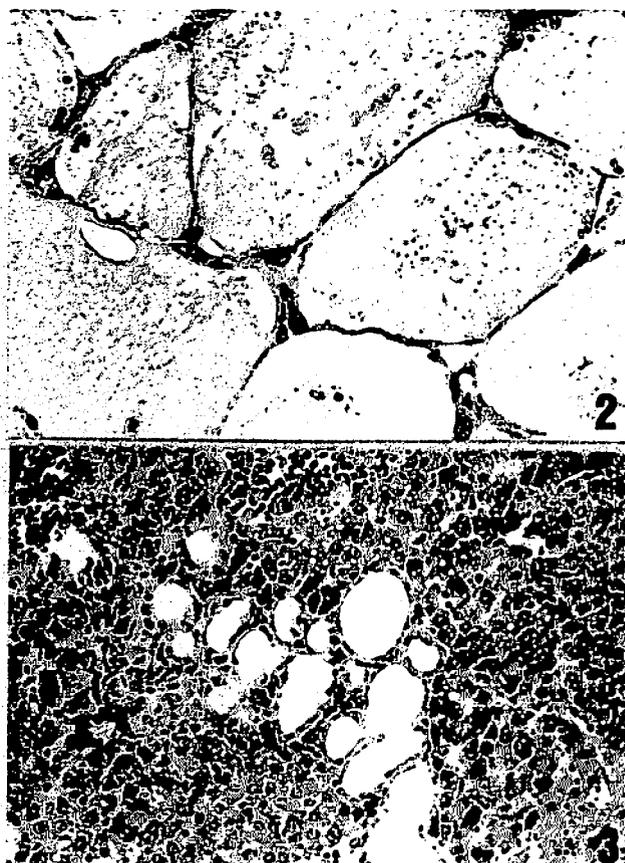


ラットの肝

日本生物科学研究所出題 第24回獣医病理学研修会標本No.409



動物：F344/DuCrjラット，118週齢，雌。

臨床的事項：5週齢で購入し，生涯飼育試験に供した。SPF環境下で個別飼育し，飼料と水は自由に摂取させた。96週齢時に右精巣萎縮を，114週齢時には左大腿部皮下に硬い腫瘤を認め，削痂が目立ち，118週齢時に放血殺した。血液生化学的検査で異常に上昇したのは，総コレステロール，リン脂質，クレアチニン，LDHおよびBUN値であった。

剖検所見：(1)左大腿部皮下鶏卵大腫瘤。(2)肝，帯黄色腫大，多発性黄色斑，外側右葉大豆大腫瘤。(3)脾腫。(4)腎，帯黄色表面顆粒状，多発性小嚢胞。(5)腎門リンパ節腫大。(6)精巣，多発性黄白色結節，右萎縮，左腫大。(7)下垂体出血腫大。(8)副腎腫大。(9)大動脈肥壁厚。

病理組織学的所見：肝小葉内に膜状の壁によって境界される多房性のシスト形成巣が散在した。病巣の分布状態に特徴は無く，多くはhyperplasticな肝細胞が存在し，肝細胞索の構築に乱れがある小葉内に認められた (Fig. 1, ×60)。シスト内には赤血球や血栓が散見されたが，多くは好酸性でalcian-blue陽性の酸性ムコ多糖類 (glycosaminoglycan) を含んでいた。シストの内腔と隣

接する類洞，中心静脈あるいは小葉間静脈との連続性は認められなかった。シストの壁は長い細胞質突起を持つ細胞より成り (Fig. 2, ×250)，one step trichrome染色で緑に染まった。液銀染色ではシストの壁に沿って繊細な銀好性の細網線維 (type III collagen) が認められた。その他，間質に胆管増生，類洞に髓外造血巣および小葉周辺性に肝細胞の脂肪浸潤が認められ (Fig. 3, ×100)，好塩基性変性巣および壊死巣も散見されたが，シスト形成巣との直接の関連性は認められなかった。

考察：本病巣は類洞・中心静脈の限局性拡張により血液貯溜腔が形成されるpeliosis hepatisの像とは形態的に異なり，Bannashら (1981) がラットの実験例で報告したspongiosis hepatisの像と一致していた。Bannashらはシストの壁を構成する細胞は類洞内皮細胞ではなく，glycosaminoglycanとtype III collagenの産生能を有する伊東細胞であると報告している。一方，老齢ラットの同病変の自然発生例では，Lee (1983) はシストの壁細胞は洞内皮細胞であると報告している。

病理組織学的診断：老齢ラットの肝に見られた海綿状シスト形成。